

7/18 東京二期会 プッチーニ「歌劇《蝶々夫人》」

記憶に長く留めたい一夜に。まずはダン・エッティンガーの指揮が振幅大きく緩急烈しく、東京フィルとともに躍動感みなぎる音楽を奏でたことを賞賛。冒頭からそれはスピーディでありながら、終盤の〈悔悟の三重唱〉のような荘重なページも雄弁に表現し、「楽譜の細部に対するイメージを一新させる」名演を披露した。歌手たちも歌稽古の段階から綿密に準備したのだろう。棒の鋭さに適うびしっとした歌いぶりが続いたが、なかでも、蝶々さん役のソプラノ大村博美の初々しさが特筆すべきものに。登場シーンでは高い変二音を麗しく歌い上げ、アリア〈ある晴れた日に〉も言葉をよく届け、抒情性際立つ歌いまわしなど圧巻と思う。続いて、ピンカートン役のテノール城宏憲も歯切れのよいフレージングで好演。スズキ役のメゾソプラノ花房英里子とシャープレス役のバリトン今井俊輔も精緻な歌いぶりで人物に厚みを持たせていた。なお、ゴロー役の演唱の力も非常に高く、キャスト表を見たら近藤圭とあり目を丸くした。この二枚目バリトンに女衞役をあてがうという贅沢さも、舞台に艶をもたらす一助となったよう。彼の熱演で、宮本亞門の演出プランもより俊敏に表現されたと思われた。 ●岸純信

会場=東京文化会館／出演=ダン・エッティンガー(指揮)、大村博美(蝶々夫人)、城宏憲(ピンカートン)、今井俊輔(シャープレス)、東京フィルハーモニー交響楽団、他／演出=宮本亞門



©寺司正彦／公益財団法人東京二期会